玉虫厨子

玄奘大學　應用日語學系　助理教授
椿　光之助（つばき　みつのすけ）

本稿では、自己紹介の後、玉虫厨子についての文章を書こうと思ったエピソードをご紹介したいと思います。

私が玉虫厨子[i]の存在を知ったのは、おそらく、山口大学教育学部附属山口中学校に在学していた頃ではないかと思います。その頃は、ベルリンの壁の崩壊、ソビエト連邦の崩壊などがありました。玉虫厨子と聞いて、「殺生を禁ずる仏教の道具でありながら、なぜ、昆虫のタマムシを材料に使ったのか」ということが特に不思議に思えて、友人と「変だね」と話した記憶があります。

その後、私は、愛媛県松山市の愛光学園高等学校に進学し、いわゆる受験勉強に没頭しました。ちょうど、阪神淡路大震災が起こった頃です。同級生の中にも、ご自宅が被災された方がいらっしゃいました。松山市では、大渇水もありました。日本でコメが不作だったので、緊急輸入されたタイ米が全国に配給されたこともありました。寮のご飯には、結構長い間、細長いお米が混ざっていました。日本史の資料には、やはり、玉虫厨子が紹介されていましたが、「なぜ、タマムシなの？」という問いの答えは、まだまだ見つけていませんでした。

その後、東京大学に入学しました。その頃は、バブル崩壊後の長期不況の真っ只中で、いわゆる「就職氷河期」の時期でした。私は、先輩に誘われて、東京大学経済学部学生経友会の幹事になり、同窓会名簿を活用して、自分たちで企業見学会や就職セミナーを企画・運営して、学部生の就職活動を支援しました。新聞の紙面には不良債権の文字が溢れ、製鉄業界は「鉄冷え」と呼ばれる大不況に苦しみ、銀行の大合併が進み、商社不要論などが流布していた頃です。東京大学経済学部の授業では、日本が「失われた 10 年」からどのように脱却すれば良いのか、真剣に悩み苦しんでいらした先生方が登壇され、シリアスな内容の講義をされていました。その頃は、まだ、「官庁の文章は玉虫色[ii]だ」と言えば、誰もがその意味を理解できるような時代でした。

東京大学を卒業してから 10 年くらいの間は、私の人生そのものが「玉虫色」でした。民間企業で国内に参入してくる外資に対抗する方法を考えたり、家業の従業員の雇用を確保しながら負債を減らす方法を家族と一緒に考えたり、街づくりと家業の業態転換の両立を図るために、バイオエタノールの製造やアグリビジネスについて佐賀大学に学びに行ったり、佐賀城お堀のハス再生プロジェクトで外来種のカメによる食害の対策と街づくりについての研究に参画したり・・・。振り返れば、いろいろなことにそれなりにやりがいを感じていて、それぞれのことをそれなりに頑張ったのではあります。しかし、どうも、本当に知りたいと思う学問的なことについては、じっくりと勉強できる環境には恵まれず、これといった専門性を構築できた実感があったわけでもありませんでした。個人ではどうすることもできない大きな時代のうねりに飲まれてしまった時期であったのだと思います。

ここで、この頃の日本の若手の状況を垣間見ることができるデータをお示ししたいと思います。図 1 は、文部科学省の「学校基本調査」の各年度データから時系列データを作成して、1989（平成元）年度から 30 年間の男女別の博士課程への入学志願者数と入学者数の推移を表したものです。男性の博士課程入学者数は 1995（平成 7 ）年度から 20 年以上 1 万人を上回り、特に 1999（平成 11）年以降の数年間は 1 万 2 千人を超えました。女性の博士課程入学者数も、1999（平成 11）年度以降 4 千人を上回り続けています。平成 10 年代は、日本経済が長期不況から少しずつ脱却していき、リーマンショックに至るまでの試行錯誤の時期であり、いわゆる「就職氷河期世代」が社会に巣立って若手として過ごした時代です。将来の見通しがはっきりしない玉虫色の状況の中、動機が積極的か消極的かはさておき、大学院に進学しようと考えた学生が多かった状況が、このグラフからもある程度推測することができそうです。

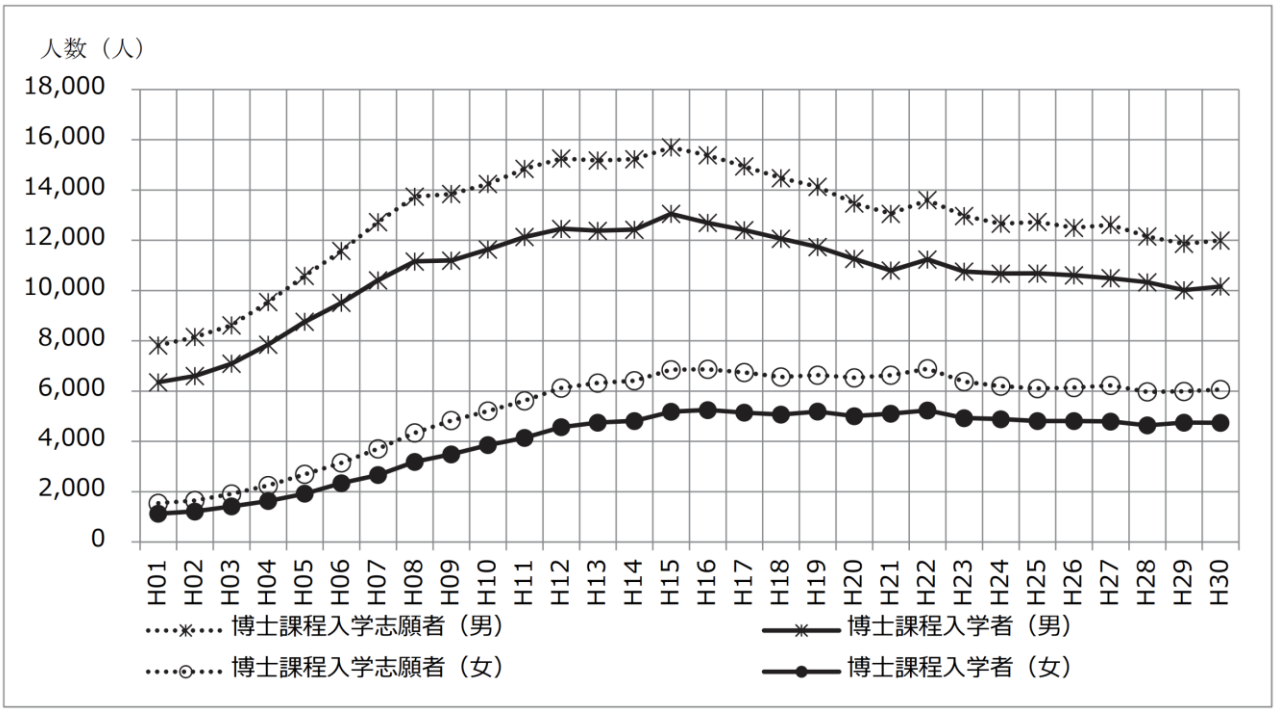

図 1 ：男女別の博士課程への入学志願者数と入学者数の推移
椿光之助（2019）「理系分野の博士人材の多様化の計測：平成元年度～30 年度学校基本調査データによる女性博士課程入学者数等の検討」の「概要図 2：男女別の博士課程への入学志願者数と入学者数の推移」を転載しました。このグラフは、学校基本調査各年度データから時系列データを作成して描画してあります。

さて、2010 年頃、家業の改革がひと段落して、私は、漸く、一人の個人として専門性を高めるための「再チャレンジ」の勉強の機会を授かることができました。家業のお客様のご縁などもあって、私は、山口大学経済学部の塚田広人先生のご指導のもとで、東京大学在学中に消化不良であった経済学について、腰を据えて学び直すことにしました。東京大学経済学部在学中のゼミの指導教員でいらした吉川洋先生が「これからの時代は Sustainability が重要だ」とおっしゃっていたのを思い出し、私は、塚田先生とご相談して、ケンブリッジ大学のパーサ・ダスグプタ先生が書かれて、京都大学経済学部の植田和弘先生が翻訳された『サステイナビリティの経済学』とい

う本を中心に研究を進めることにしました。この本の内容はとても難しかったのですが、ある時、山口大学経済学部の故宮崎充保先生が、もたもたしている私の姿をご覧になって、「本は、いつまでに読む、と決めて読むものではない。わかるまで読む、という覚悟が必要だ。」と教えてくださり、この本に真正面から対峙する勇気が湧いてきました。山口大学大学院東アジア研究科では、塚田広人先生、植村高久先生、仲間瑞樹先生をはじめ、多くの先生が論文作成途中の議論に参加して励ましてくださいました。数多くの方々のご支援のおかげで、慣れない理論研究を何とか完遂することができました。山口大学経済学部の陳禮俊先生らが開催されたシンポジウムにいらっしゃった植田和弘先生に、「『サステイナビリティの経済学』を拝読しました」とお伝えすると、一言、「難しかったやろ」とおっしゃって、ニヤリとされたのが、今でも記憶に残っています。

私が、日本時間学会に学生会員として入会したのは、2015 年であったと思います。日本時間学会といくつかの学会で行った学会報告では、参加者の方々と有益な議論を交わすことができ、また、自分とは異なるテーマの研究の報告を聞くことで触発されたことも多く、研究の進展にとても役に立ちました。『時間学研究』第 6 巻に掲載された「グローバル・コモンズの強い持続可能性を考慮した補完的人的資本の蓄積の一考察」は、自分で書いて投稿して学会の査読に合格し、私の人生で初めて学術雑誌に掲載された論文です。査読をしてくださった先生が、この論文について好意的に捉えてくださったことに、とても感謝いたしております。経験不足であったこともあり、論文の作法などの観点からは反省が残りましたが、何年もたった今でも、私にとっては記念すべき特別な論文です。

山口大学大学院東アジア研究科を修了してからは、少しの間、山口大学大学院東アジア研究科東アジアコラボ研究推進体特別研究員として格差に関する研究を行った後、文部科学省科学技術・学術政策研究所に就職しました。そこでは、端的に申し上げれば、徐々に広がりつつあった EBPM（Evidence Based Policy Making）の考え方に則り、データを使って論拠を示しながら説得力のある政策を形成し、日本政府の科学技術・学術政策が「玉虫色」の政策から脱却していくための調査研究を行っていました。調査研究業務もさることながら、経済産業省のイノベーション環境整備研修や総務省統計研究研修所の統計研修など、様々な高度な研修を受講させていただいたことに感謝致しております。

文部科学省科学技術・学術政策研究所を任期満了で退職する頃から、本格的に転職活動を始めました。その頃は、「人手不足」との報道が出ていましたが、実際には、IT 関連の言語を使ってシステム開発を業務で行った経験のあるエンジニアに求人が集中していたように思います。他方で、私に似た社会科学系、もしくは事務系のスキルの人材は、金融機関が AI を導入したりして人員削減を進めていたこともあったらしく、労働市場に比較的多く供給されていたようです。そのためか、書類審査を通過して面接に呼ばれても、企業側の態度は掴みどころがない「玉虫色」であり、結局、長い間、就職が決まりませんでした。

やがて、まだ、新型肺炎の被害が認識されていなかった 2019 年 12 月ごろに、玄奘大學の面接試験を受けることになり、生まれて初めて台湾に行きました。そして、新型肺炎の被害がだんだ

ん深刻になる中で、採用の通知をいただき、各国の対応がどのようになるか予想がつかない「玉虫色」の状況の中、2020 年 2 月の初めに台湾に来て玄奘大學に就職しました。今でこそ、台湾の状況は穏やかな感じですが、4 月ごろまでは、大学が急遽休校になる可能性や、遠隔講義が突然始まる可能性がかなり大きいと認識されていたため、平常の講義の他に、新型肺炎対策の研修や様々な準備作業があり、とても大変でした。

それでは、私が玉虫厨子について思い出し、これについて書きたいと思ったきっかけとなった、台湾でのエピソードをご紹介したいと思います。玄奘大學は、新竹市の郊外の山の上に立地しています。新竹市は、いつも爽やかな海風が吹いていて「風の街」と呼ばれており、昔からこの風を利用して「米粉」が作られてきました。市の中心部には、あちこちに緑地が整備されていて、そこを流れるせせらぎには沢山の淡水魚が泳いでいます。私は、街の中心部の緑地や玄奘大學のキャンパスで、日本では環境省の絶滅危惧Ⅱ類（VU)に指定[iii]されている「黒冠麻鷺」（ズグロミゾゴイ ）を何度も見かけました。この鳥の名前を教えてくださった玄奘大學の台湾人の先生に、「黒冠麻鷺は、日本では絶滅危惧種に指定されています」と伝えると、「こんな地味でそこら中にいる鳥が絶滅危惧種というような珍重されるべき鳥であるはずがない」と呆れられて、真面目に取り合ってもらえませんでした。玄奘大學の周りにはバナナやドラゴンフルーツの畑、森林や溜池等があります。キャンパスの自然環境もとても豊かで、様々な種類の小鳥が囀り、リス、コウモリ、セミ、ヘビなどが暮らしています。そして、私は、この玄奘大學のキャンパスで、何度かタマムシを発見したのでした。

最初は、確か、今年、2020 年 5 月ごろだったと思います。キャンパスのアスファルトの道の上に、一匹のタマムシの遺骸が落ちていました。このタマムシは死んでいたのですが、驚いたことに、とても美しいやや緑がかった虹色に輝いていました。数日後、そこを通りかかると、道路の割れ目に、あのタマムシの遺骸が挟まっていました。しかし、相変わらず、美しく輝いていました。このことから、いくつかのことが推測できました。例えば、①「キャンパスにいる動物たちは、タマムシの遺骸をあまり食べようとしないらしい」、②「タマムシの遺骸は、自然環境に放置されても、なかなかその美しい輝きを失わない」、といったことです。

これをきっかけに、数十年前、玉虫厨子について知った頃、友人と話した疑問について考えるようになりました。すなわち、「殺生を禁止する仏教の道具である厨子に、なぜ、大量のタマムシの翅を使用したのか」という問いです。私は、この問いの答えとして、「もしかすると、玉虫厨子は、生きたタマムシではなく、死んだタマムシの遺骸を集めて、美しい翅を採取したのかもしれない」という仮説を持つようになりました。死んでも美しい輝きを長く失わないタマムシに、当時の人々も何か特別な感覚を持っていたのではないでしょうか。なお、この仮説の検証は、生物学や考古学など多様な学問分野に広くまたがっているテーマであり、しばらくは個人的な趣味の範囲で、時間を捻出しながら、少しずつ進めていきたいと思っております。（完）

図２：黒冠麻鷺（ズグロミゾゴイ）

2020 年 7 月、臺灣新竹市内にて筆者が撮影。

＜参考資料＞

- 石田尚豊（1998）「玉虫厨子をめぐって：『文献の学』と『物の学』」『史学雑誌』107 巻 12 号.
- 椿光之助（2019）「理系分野の博士人材の多様化の計測 ―平成元年度～30 年度学校基本調査データによる女性博士課程入学者数等の検討―」NISTEP DISCUSSION PAPER No.173, 文部科学省科学技術・学術政策研究所.
- 「日本のレッドデータ検索システム」＜http://jpnrdb.com/search.php?mode=map&q=02050010044＞（2020 年 7 月 19 日アクセス）
- 「新宿駅前に謎の鳥出現 まさかの絶滅危惧種『ミゾゴイ』と判明」＜https://news.livedoor.com/article/detail/18458960/＞（2020 年 7 月 19 日アクセス）

i 石田（1998）による玉虫厨子のタマムシの翅に関わる説明は次のとおりです。「玉虫厨子は上部の宮殿部、それを支える中段の須弥座、さらに下部の台脚とからなる。宮殿部の正面と両側面の扉、背面、および須弥座の四面には、それぞれ仏画が描かれている。［中略］玉虫厨子の宮殿部

のみに、荘厳用として、金銅の透し金具の下に、玉虫の翅が敷かれており、わずかに残存するが、玉虫の翅は酸、アルカリにより腐食しない幾丁質と称する物質からなるため、今なお全く輝きを失っていない。しかも玉虫は朽木にのみ卵を生み、そこから出生するに至っては、泥土の蓮華に通い、釈尊が永遠に霊鷲山にあって衆生済度するという、穢世往生の思想の象徴に他ならず、今なお大化改新以前の光をまのあたりにすることができるのである。」

ii 本稿では「玉虫色」をやや広い意味に捉え、「つかみどころない曖昧な様子」を表す言葉として使用します。

iii 詳しくは「日本のレッドデータ検索システム」のウェブサイトなどをご参照ください。2020 年 6 月には、JR 新宿駅前に、ズグロミゾゴイの仲間のミゾゴイが現れて、報道されました。